

ライフレビューのSummaryに関する物語論的考察 —介護老人保健施設入所者のもう一つの事例—

A narratological analysis of Life Review's Summary: Another case study of two elderly men at a Japanese nursing home

奥田 恭士

兵庫県立大学

Yasushi Okuda
University of Hyogo

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the mechanism and function of life review's summary, reconstruction of narratives told by two elderly Japanese men at a nursing home, from a cognitive and narratological point of view. Firstly, we explain the background behind this research and the interpretative devices generally used in the narratology. This study is part of a project currently being carried out in collaboration with researchers in other fields of study, in which the life reviews of the elderly were collected. Secondly, we present a narratological analysis of the two contrasting summaries, poor or wealthy in remarkable incidents, focusing on narrative functions and interpretative devices. Finally, we consider how the narratological analysis can make a contribution to the ongoing interdisciplinary research. (This work was supported by JSPS KAKENHI Grant-in-Aid for Scientific Research(C) Number 16K02606.)

1. 研究の背景と目的

本論考は、二つの科学研究費助成に関わるナラティブ研究¹の一環であり、介護老人保健施設で収集したナラティブ・データに基づき、先に共同研究者が文体論的視点から分析を加えた論考²に対して、これに接続する部分を構成し、それとは異なる事例を物語論（ナラトロジー）の観点から扱ったものである。前研究では、共同研究者より提供されたライフレビューを対象としながら具体的な分析を進めた。その結果、物語論の手法を援用することによって、非文学テキストにおける再構成と認知の関係に考察を加え、文学テキスト分析にもいくつかの新たな視点を見出し得た。その後、適用したナラ

トロロジーの概念に補正を加え、最近の発表³では、ナラティブ研究における「関係性」を軸として、概念の整理をしながら、再度ライフレビューのSummaryについて検討し直した。本稿は、その結果を踏まえ、前研究での事例分析に加筆・修正をほどこしたものである。

2. 研究の方法

ライフレビュー分析には、インタビューをトランスクリプトする過程で聞き手が語りを再構成したものを対象とし、ナラトロジーで一般的と考えられるいくつかの概念を応用することによって、分析手法の汎用性を模索することに主眼を置いた。分析の前提となる概念については、すでにいくつかの論考⁴で論じていることから、この小論ではその詳細を割愛し、最小限の説明にとどめたい。

ライフレビューのSummaryを「テキスト」(Texte)として扱う場合、Gerard Genetteの理論に準じると、その主要な要素が三つ考えられる。Genetteは「語り」のレベルを三つに分けた。その下位概念の第一に、「物語内容」(Histoire/Story)がある。主に出来事の連続体を指すが、本稿ではこれを「出来事性」という用語で示す。内容に関わるレベルとなるため、通常は「語られるもの」が対象となるが、その背後に「語られないもの」が潜んでいる点に着目したい。第二に、ライフレビューの中味を維持する別の容器として「要約」(Summary)を位置づける。「要約」は、Genetteが分類するもうひとつの下位概念「レシ」(Récit/Narrative)に当たり、本稿のキー・ポイントとなる「再構成」、すなわちRita Charonの「プロット化」(Emplotment)とも大きく関わってくるからだ。第三は、「語る行為」(Narration/Narrating)である。Genetteの下位概念化のうち最も重要なレベルであり、ここから筆者は、語り手と聞き手との「関係性」(Relationship)に目を向けた。双方の個別性(Singularity)がどのように共感あるいは対峙し合うのか。この点を明らかにすることが本稿の最終目的と言える。

これに関連する概念区分をいくつか補足しておきたい。本稿で扱う「要約」の形態的特徴として、Genetteの言う「パランプセスト」(Palimpsest)が想定できる。本来、前の文書を削り、重ね書きした羊皮紙に由来し、模倣テキストに適用される概念である。先行テキスト(Hypotexte)は下層、後続テキスト(Hypertexte)は上層となり、語り手の語り(逐語・録音)を下層の「先行テキスト」(Hypotexte)、下層が透けて見える上層の「後続テキスト」(Hypertexte)を聞き手の要約(シートの記述)とし、模倣テキストの一種と位置づける。

後述するSummaryに見られる現象として二点指摘しておく。ひとつは、「コーダ」(Coda)である。アリストテレスは『詩学』で悲劇(物語)の基本的な特徴として「はじめ」(beginning/commencement)「中間」(middle/milieu)「終わり」(end/fin)という一連の流れに着目した。「はじめ」は古来より冒頭句(Incipit)研究の対象となっており、「中間」は「プロット化」の中心的な部分を構成する。「終わり」に当たる「結末」は、「中間」で展開する出来事の「解決」(resolution)ないし「結果」(result)という役割(頭に対する尻)に加えて、もうひとつ「コーダ」(coda)という作品全体の“ending”、すなわち語り手による最終的な締め(本体に対する尻尾cauda)の役割を果たす。口語分析においてラボフ(Labov)&ワレツキー(Waletzky)が当初援用した概念である⁵。もうひとつは、語り手の越境を示す現象「メタレプス」(Métalepse)で、Genetteが象嵌構造を持つ枠物語において、意識・無意識を問わず語り手が語りのレベルの境界を侵犯する現象として概念化した。

最後に事例分析の主たる観点として次の三つを挙げておく。ひとつは「叙法」(話法)である。Wayne C.Boothは「示すこと」(showing)と「話す[語る]こと」(telling)に二極化した。前者は「場面」「提示」であり、ミメシス性が高く、対話の再現など、直接話法が主に用いられる。後者は「要約」「叙述」となり、ディエゲシスあるいは解説を意味し、間接話法が主として用いられる。Genetteはこれを踏まえて両者の中間形態を加え、20世紀文学を説明する場合に不可欠な「自由間接話法による拡張」を挙げた。第二に、Charonが提唱する「プロット化」だが、これはナラティブの中間部分に深く関わり、因果性に基づき再構成する行為と言える。E.M.Forsterがしばしば引用され、「ストーリー」(story)と「プロット」(plot)の違いに言及されるが、Forsterは「謎のあるプロット」(a plot with a mystery)にも触れている。「プロット化」は、間テクスト性(intertextuality)や間主体[主観]性(intersubjectivity)によって再構成される傾向がある点も注意したい。三つ目は、Genetteが物語を構成するテキストとは区別すべきもうひとつのレベルとして設定した概念、すなわち「パラテキスト」(Paratexte)である。分析に際してSummaryに付随し、同時にテキストに影響を与える「二つの身体的指標」がこれに当たる。

分析の恣意性や妥当性については、文学テキストにおいてもその検証は容易ではない。次におこなう非文学テキスト分析への適用については、あくまでチャレンジングな試みである点を付記しておく。

3. Summaryの分析

3.1 分析対象について

本稿で扱う資料は、介護老人保健施設入所者を対象としたライフレビューの聞き取り調査のうち、対象者(9名のべ15回)のインタビュー内容と観察記録を1枚のシートに記載したものである。

資料提供者である内田勇人の研究は、主として認知機能の向上を測る数値的方法であると考えられる。R.N.Butlerに始まる「回想法」には、認知機能を高める利点があり、それを数値的なパラメーターに拠って裏づけるというのが基本なスタンスと言えるだろう。ライフレビューを「聞く」ということ自体に意味があり、年齢(高齢の度合い)、介護度、認知機能を測るHDSR(長谷川式簡易知能評価スケール)やMMSE(ミニメンタルステート検査)、場合によってはGDS(高齢者用の抑うつ尺度)等の計測によって回想の前後に生じる変化を見ていくことになる。資料は、録音記録(逐語)ではなく、通常行われている調査方法によるもの(シートへの要約)である。

3.2 対象となるSummaryに関する概要

インタビューに関する理論・方法・実践に関しては、幅広く層の厚い研究がすでになされており、現在でもフィールドや実践現場から研究成果の反映が更新されつづけている。具体的な例が数多くあり、それに基づいてインタビュー実習など、学生の育成にも熱心な取り組みがなされているのが現状である。高齢者のライフレビューに限定しても、分野外の者が知っておくべきことが少なくない。「トランスクリプト」の方法論にもリジッドな研究例が見られる。資料は一連のインタビュー実践のうち、録音起こし(逐語スクリプト)がなく、1次テキストを省略した形でのインタビューによる一種のトランスクリプトであり、これをどう考えるかが筆者に課された作業となる。

聞き手は、要介護高齢者の心身の機能評価について学習し、面接経験の豊富な健康教育学を専攻する大学生6名である。これまでも高齢者施設でのインタビュー経験があり、主としてライフライン

に沿った一定の質問例を準備して1人の高齢者について1名ないし2名1組で話を聞いている。厳密な意味でのトランスクリプトではないから、語りの内容の要約と観察記録をシートへ記載するという形を取っている。話し言葉の分析に用いるトランスクリプト・システムに基づく書記方法や通常よく用いられている記号などを多用することはない。しかし「談話を文字化するための原則」のうち、カテゴリーデザインと読みやすさという点は十分に考慮している。例えば、要約シートを作る際に用いる記号は、通常われわれがノートやメモを取るときに心がける程度のものに限られているものの、中黒（・）や小丸（○）による項目の列記、まとめりに□★☆や区切り線を使い、下線を引いて矢印や棒線をのばして欄内・欄外に補足や言い換えを書き込む、また（ ）による別記、□や○での囲みを使った強調など、聞き手の個性に応じた分かりやすいまとめ方となっている。

シートは、左側が自由記述の大きなスペース（要約）、右側に項目に細分された観察記録欄（記録）が設けてある。聞き手は高齢者のライフレビューを、その人のライフラインに沿って質問しながら、10分間聞く（①小さかった子どもの頃、小学校の頃、10歳代の頃、②20歳代から30歳代の頃、③40歳代から50歳代の頃、④60歳代以降、まとめ）。観察記録は簡潔に項目への該当があるかの有無を基本にしているが、聞き手によっては、観察記録の欄外に「窓の方をみて考えてたけど、話す時はこちらを見てくれる」など、自分が感じたことをできるだけ記そうとしている。

Summary資料には、逐語資料とは異なり、基本的には聞き手と語り手との臨場的要素はない。また、対話の中で語りのパッセージを取れるかどうかを測る作業もカットされる。また、時間的な秩序に制約されず、基本的にはどこから読んでもよいという利点がある。逐語スクリプトや一定量を持つテキストでも同様の読み方は可能だが、ひとつが1枚のシートの範囲で構成されているため、視覚的・空間的に把握しやすい。メモ構成のため、日本語表記の上では基本的には人称が記されず、暗黙の三人称という形態を取る。ライフレビューの聞き取り調査対象は9名のべ15回であり、この小論ではすべてを均等に分析することはむずかしい。そこで、対比的な二つの事例、出来事性の低いBさん、出来事性の高いCさんを取り上げ、聞き手（学生）をA/A'として分析を進める。

3.3 ライフレビューSummaryの分析 (1)

3.3.1 最も短いSummary

のべ15回のライフレビューのうち、最も出来事性に乏しく、きわめて簡略にまとめられたBさん（男性）の事例を見てみよう。（原文は手書き、書記は原文のまま）

◇1回目「20代まで覚えていない。20～40代→漁船の大工。1週間から2週間どっかに行ってることもあった。」[Bさんに対して一人の聞き手A（女子学生）がおこなったインタビュー]

20歳までは空白、20歳代から40歳代までの出来事は、「漁船の大工」という言葉にとどまる。それにプラスされるのは、どの時点か明確でない「どこかに行ってることもあった」という短い行為の表現である。これが、第1回目（10分）のインタビューの中から聞き手がとらえることのできたBさんの人生の断片ということになる。2回目の記述を見てみよう。

◇2回目(1)「20歳まで遊んでいた。4年生からお仕事でおじさんの所にお手伝いしていた。漁船を作っていた→50mくらい。20～40歳まで 友達とあっちこっちで怒られていた。」

第1回目では、Bさんは20歳までのことは覚えていないと言ったが、ここでは「遊んでいた」という言葉に変わっている。「4年生」という明確な年次と、その少年期に「おじさんの手伝い」という具体的な言葉が書き込まれた。そして、20歳代以降、第1回目で唯一主要な出来事であった「漁船の大工」については、その対象である「漁船」が「50mくらい」とであると報告される。更に、第1回目の前後関係が明確でなかった「1週間から2週間どっかに行ってることもあった」という表現から、同様に関係性が特定できない「友達とあっちこっちで怒られていた」という、主体に具象性が付与された記述へと変わった。これは、1回目では光の当たっていなかった部分が本来光を発しうるものであり、それを推測し想像力をふくらませれば、2回目でもその出来事に想いをめぐらすことが十分できたことを示している。もしそうであれば、3回目のライフレビューがどんなものとなるかを想定することがいくぶんかは可能であろう。少なくとも、記された内容がそこで終わっていないという認識だけは「書き手」に残る。それを証明するかのように、2回目の記述の最後はこう終わっている。

◇2回目(2)「いっぱい話してくれたが、聞き取ることができなかった。」

この短いライフレビュー報告は、何を意味しているのか。

3.3.2 Summaryの解釈

Bさんの話した内容をもとに、聞き手が拾い出した「出来事」はきわめて少ない。記述は上に挙げたものに限られている。しかし、Aは記述できないがBさんの物語が「あった」ことを「いっぱい話してくれたが、聞き取ることができなかった。」と書くことによって証言しようとしている。

このライフレビューは確かにBさんの物語である。出来事の主体はBさんであり、省略されているが元の人称は「私」=Bさんである。しかし、Bさんが1人称で語ったもの自体は表面に現れていない。彼の言葉は、聞き手であるインタビュアーの視点から、主として出来事の形(きわめて少ないが)で「要約」(再構成)されている。では、Bさんが語ったもの自体はどこにあるのか。それはオーラルの形で時間の流れに沿って「存在した」10分間の「言葉」であり、今は消えてしまっていて存在しない。ICレコーダーによる録音記録(逐語)あるいはインタビュアーの聞き書きによる逐語に近いメモがあれば、それがBさんの語ったものとほぼ等価ということになる。しかし、等価ではあるが同じものではない。口述が書承になるとき、「ナラティブ」(内容を維持する器)も変化したと考えられるからだ。Genetteの定義する物語内容(イストワール)が別の物語言説(レシ)に還元されたものと表現することができるだろう。なぜなら、出来事性を報告する主体は、この場合「聞き手」だからである。対話の再現ではなく、語り手による言説である以上、この種の「要約」はほぼすべてこの形態であり、ミメシス性がきわめて弱いと言える。

ここで、先ほど2回目のシートの最後に記された記述を思い出してみよう。それは、「いっぱい話してくれたが、聞き取ることができなかった」というものであった。この主体は明らかに「聞き手」である。文学テキストであれば、この現象を、Bさんの物語の中に要約行為を行う「語り手」(この

場合はインタビューの「聞き手」)が突然主体として「介入」してきた、と解釈することができる。統括的視点を維持してきたはずの「書き手」はここで性質の異なる「語り手」へと変わっているのである。確かに、日本語は英語・フランス語と違って、人称や時制が分かりにくい。また、「観察記録」の余白は自由記述であるから、書き手にとりわけ「介入」の意識があったとすることはむしろかきいとも言える。しかし、この記述を文学テキストとして扱うならば、統括的視点が一定であった三人称的なテキストの均衡が、作者の突然の介入によって崩れたと解釈することができる。物語論的には一種の「メタレプス」に相当し、語り手が語りのレベルの境界を侵犯する現象と考えられる。文学作品の中でも特に象嵌構造を持つ枠物語では、意識・無意識を問わず語り手が枠を越境するといった現象がしばしば見られるからである。

叙法的にはどうだろうか。基本的な叙法は「示すこと」のレベル「Bさんは私に言った“僕は漁船の大工だった”」ではなく、「語ること」のレベル「Bさんは私に自分(he)は漁船の大工だったと言った」であり、最後の言説は「語ること」のレベル(「私(A)は自分(I)が聞き取ることができなかったと思った」)であるよりもむしろ、Genetteの言う二つの中間的な言説、つまり「間接話法に転換された言説」(「私(A)は思った。自分(I)はそれを聞き取ることができなかったと」)に変わったと考えることができる。「語ること」よりもミメシス性が高く、実際に考えたことを忠実に再現したと「読み手」に保証を与えるという役割よりも、むしろ自由間接話法に近いとすることができる。この叙法の変化によって、テキスト内部に存在しなかったはずの人物(作者)がテキスト内主人公についてコメントする形と似た印象を「読み手」(筆者)に与えた。このような一種のコメントはブースの言う「論評」(commentary)と解釈することも可能だが、統括的視点からの「Aは聞き取ることができなかった」という客観的記述や、本来の主体=Bさんを視点とする「僕(B)はAさん(she)は聞き取ることができなかったと思った」という記述とは異なっており、新たな語り手によって前の語り手による出来事のほとんどを括弧に括る「ディクション」(diction)になったと考えることができるだろう。「聞き手」であったAが「聞き手」から客観的な「書き手」に変わり、その主体が記述を進めていくのだが、最後に新たな「語り手」へと変貌する。そのため、Aはその存在を強調するかのように、Bさんの出来事は「存在した」が、自分には「言葉にすることができなかった」と言明することになったのである。

この短いSummaryは「語り」のパスセージではないし、また出来事性も低いため、語りの基本構造である「はじめ」「中間」「終わり」の流れを形成するには至っていない。しかし、不思議なことに読み手(筆者)にはインパクトがあった。それは、視点や叙法の変化を伴う形で、最後の言説が一種の「コーダ」を成しているからではないか。この点を更に別の角度から見よう。

3.3.3 Summaryの「パラテキスト」

このライフレビューは、「東大式観察評価スケール」を参考とし、これに言語的コミュニケーション、および非言語的コミュニケーションの程度についての観察記録を追加したシートに記述されたもの(聞き手1名)である。具体的には、Bさん(男性)の観察記録は以下のように記された。

◇1回目：①発語回数 普通 ②発語の明快さ あまり明快ではない ③話のまとまり あまりない
④話し方の印象 ぼそぼそ話す ⑤顔の表情 あまり変わらず ⑥ゼスチャーの有無 無し

◇2回目:①発語回数 多い。前回より増えた。②発語の明快さ 言っていることがわかりにくく、ききとりができなかった。③話のまとめり 空欄 ④話し方の印象 空欄 ⑤顔の表情 前回よりも増えた。⑥ゼスチャーの有無 前はまったくなかったが、今回はあった。(下線筆者.以下同じ)

この情報は「テキスト」とはレベルの異なるテキストであり、テキスト本体を補完するだけでなく本体に大きな影響を与えるテキストである。Genetteが位置づけた一種の「パラテキスト」と見なすことができる。テキストにはなかった、ひとつのはっきりとした心理的推移が感じ取れるからだ。表情の変化や身振りが増え、話す内容も増えた。しかし、一方で、もともと分かりにくかった話が、前よりももっとまとめりがなくなった。テキスト本体には現れてこないが、語り手と聞き手の対面による臨場性が現れており、1回目よりもたくさん話してくれた、それなのに、自分には理解できる部分が少なかったと、聞き手が感じたことがこの「パラテキスト」から読み取れる。

テキストだけを対象とした場合、聞き手が10分間にわたるライフレビューの詳細を数行で「要約」しているように一見受け取られる。しかし、末尾に「いっぱい話してくれたが、聞き取ることができなかった。」と記述することによって、光を当てることのできなかった部分が「たくさんあった」ことを強く暗示する形になった。テキストだけを読むと、それが何故なのか聞き手(読み手)には分からなかったが、パラテキストを介してライフレビュー・プロセスの臨場性がより鮮明に伝わってくる。

この観察記録は聞き手の感じたままの直感的な記述と言えるが、これに数値的な情報(もうひとつのパラテキスト)を付加すると、元の言説の意味がもうひとつ別のレベルに置かれることが分かるだろう。一定時点での数値であるという留保をつけた上で、認知度検査の結果を以下に示す。

◇(男性):80歳半ば、介護度4、認知機能(HDSR:13、MMSE:12)

介護度5が上限であること、「HDSR:20以下、MMSE:21以下」は認知症と疑われることから、身体的・認知度的にナラティブが可能な範囲を大幅に下回っていることが分かる。

聞き手が事前にこの客観的数値を知らされていたかどうかは不明であるが、インタビューの開始前後から推測することは十分にできたと考えられる。確かに、聞き取りにおける「出来事性」は低い。しかし、先ほどの記述は、Bさんに潜在的な出来事性が内在することを、この記述の読み手(例えば筆者)に推測することを可能にしている。その書かれることのない影の部分に、まだ多くの出来事が含まれていると読み手に思わせ、想像する余地がたくさんあると感じさせるのはなぜだろうか。その理由は、インタビューの「聞き手」という主体が、Summaryの「書き手」が維持してきた客観性を飛び越えて「いっぱい話してくれたが、聞き取ることができなかった。」と記述した、この一点に尽きる。この段階で、それまで「なかった」と思われていたものが姿を現してくるのである。

3.3.4プロット化

光っている部分が少なく、語られない影の部分の多いもの、満面に光を放って、月であることがはっきりと分かるほど輝いているもの、さまざまなライフレビューがある。その意味では、Bさんのライフレビューは、光っている部分が少なく、語られない影の部分が多い。しかし、出来事性の乏しいBさんの語りに、「語られない影の部分」がまだたくさん「存在する」と、聞き手であった学生は「言いたかった」のだと推測できる。ニュートラルな書き手として記述しながら、どうしても最後に「こ

れで終わりではない」という“意思表示”を、新たな語り手として唐突に「介入」することで示した。それが、この要約に内在する物語論的視点の特徴と言える。

「物語」を聞く、読むという一般的な行為には「想像」と「連想」がつきものである。物語を読み、テキストを媒体として読解を進めていくプロセスの中では、「想像」と「連想」による一種の「転移」(transference)が必ず付随する。これは誰もが経験することだ。「聞き手」あるいは「読み手」には、テキストから「連想」を広げ、元のテキストを「プロット化」する手段がいくつかある。

ひとつは、「間テキスト性」による連想である。しかし、このテキストには、「はじめ」も「終わり」もなく、中間はほとんどない。最後の言説がかりうじて「コーダ」の役割を果たしているのではないかと先ほど述べた。どこにも他のテキストへの言及はないし、誰もが想像できる範囲は限られている。語り手から聞き手へ、聞き手が書き手となって読み手(筆者)へ、このプロセスの中で何が起こりうるのか。

「漁船」「若い頃」「怒られた」という単純で誰にでも起こりそうな出来事が、読み手によっては、どれほど少ない出来事でも連想を広げることを可能にする。読み手の「個別性」を根拠とし「経験」に基づく「読書」から、具体的な作品の情景を思い浮かべることが誰にでも起こりうる現象と言える。

また、これと関連して、もうひとつ「間主体性」[間主観性]に基づく連想を忘れてはならない。「間テキスト性」に先立ち、何らかの集合的意識が想定できるとすれば、海の近くで育った経験や漁船から感じるイメージ、あるいは「おじさん」「手伝い」といった言葉から聞き手や読み手が受ける印象によって、連想は広がりを持つことができるだろう。Bさんの場合、分かっている出来事が少ないが、その代わりに「余白を埋める」という行為には無限の可能性が潜んでいる。

この二つの事象は、個人的な連想に伴う「フラッシュバック」に他ならない。あくまで「個別性」に基づくものであり、同じテキストにすべての人が同じ連想をおこなうと考えることはできないが、語りが新たな経験として同期し、共有されることは十分にありうる。人はこのような方法でテキストを「プロット化」することができるのである。

3.4 ライフレビュー-Summaryの分析 (2)

3.4.1 出来事性の高いSummary

次に取りあげるCさんのライフレビュー報告(出来事性が高い)は、Bさん(出来事性が低い)とは対局にある。したがって、Summaryも詳細であるため、その全文を記さず、聞き手が記述する出来事の「まとめり」ごとに番号を符り、テキストと併記しながら、※で指示をし、簡略に説明したい。◇1回目(聞き手A、A'の2名1組)は、出来事性がきわめて高い。「語り」にまとめりがあり理解しやすかったことが要約の仕方からも分かる。まとめりごとに空白を入れレイアウトを工夫しており、下線・波下線・括弧・矢印の使用によって視覚的に理解しやすいようになっている。会話の臨場性が伝わるように「～」「(笑)」>を使用していた(「でも自分は日本人よ～(笑)」)。

(1)「功績残している気は昔はあったかな」「学校の先生もしてたけど、そろばん教えてた(※地名)」※過去の自分の位置づけが見られる。「学校の先生」に波下線が引かれ説明が加えられる。「そろばん」の話題で「※法」という聞き手(学生)にはむずかしい言葉が使われるが、矢印(↓)のコメントを読むと、聞き手である学生にも理解しやすく話そうとする姿勢が見られ、「教師」であった点が伝わる。直接話法と推測できる「な」という助詞が付加された。

- (2)「長女がミス** (地名) (自分のきょうだい)」「自分は日本生まれではない」「日本人よ～(笑)」
※4人の姉と自分(末っ子)という家族から、出生地について「** (中国大陸の地名)」「両親は** (日本の地名)」「日本人よ～～(笑)」という記述から会話の臨場性が伝わる。
- (3)「**和尚(人名)の影響で** (※昔からある格闘技)を始める」
※下線を引き「教えてはないけど石割れる」「子どもらに教えてといわれた 努力が足らんとって断った」と追記された。「断わった」という表現に含意するものがあると推測される。
- (4)「士族がしそんだったが差別は嫌い」(※先祖の間違い=聞き手)「** (地名)」「昔は階級が十個くらいあったのよ」※直接話法と推測できる「よ」という助詞が付加された。

◇2回目(聞き手同じく2名1組)も、出来事性がきわめて高い。発語が明快で話にまとまりがある点は1回目と同じである。むしろ、1回目よりも情報の質が高くなる。細部の説明が詳しく、聞き手の感情に訴えるようなエピソードが見られるようになった。記述に従前どおり「まとまり分け」はあるが、1回目ほどははっきり分かれていない。空白を利用したレイアウトがなく、どちらかという列挙する形で、中黒(・)が多用される。下線・波下線・括弧・矢印の使用量が減った。会話の臨場性を伝える書き方がない。その理由が語り手に由来するのかどうかは最後まではっきりとしない。

- (1)「**公→**の藩士」「百人一首の話 ** (地名)の大会に出た」「天皇と同年」
- (2)※地名が列挙される。そのうちのひとつ「** (地名)」に下線→「公民館でそろばんを教えた」「** (地名)の**学校の先生だった」(※1回目よりも具体化)「**算」(※「**法」から分かりやすい言葉に変わる)「練習が足りないから」(※以下は括弧つきで記されている)“「一生懸命やったら石でもわれる！」生徒が「割って！」と石をもってきた。→わってみせた” ※かなり具体的なエピソード、1回目では「断わった」としていたが、その後状況が展開したことをはっきりと示している。
- (3)「** (地方名)」「(地名)**」(※具体化)「武*** (人名)」(※1回目にも出てきたが具体的なエピソードが加わる)※ここで「原爆」だと推測できる記述が突然出てくる(「S.20.8.6にふとんだ」)そのあと「修学旅行」「遠足で行ってたらしい(近くの人)」※AとA'は、記述の関連性をつけていない。意識的か無意識的かは分からないが、記述の連続性によって、この日子どもたちがどうなったのかは容易に推測することができる。
- (4)平均寿命の話「出生地** (中国大陸の地名)」(※このときの説明が1回目よりも詳しくなる。)父の友人のこと。大きくなる前に** (日本の地名)へ来たこと。父がなくなったこと。母が** (都市名)に出て仕事。小学校は** (都市名)など、幼少期のことが続けて記されている。

3.4.2 Summaryの解釈

CさんのSummaryは、2回とも出来事がたくさんあり、またそれらは秩序立っていたためか、聞き手は容易にまとめ直すことができている。1枚のシートから記述の全体的イメージがしやすかった。しかし、一方で書き手は、シートが読まれることを想定し、パーツ分け・行間などに気を配っている。聞き手の明快な質問と話し手の明快な答えが推測できる。逐語にした場合でも、内容の豊富さやニュアンスの違いはあっても、この要約でほぼすべてが言い尽くされていると感ぜられる。

「ストーリー」は出来事性に富んでいる。出生、家族、戦争、これを経て次に「戦後の生活」が続くことが予想される。書き手はSummaryの中でCさんの物語を「プロット化」しようとしていると感じられる。このとき、話し手と聞き手との「関係性」にも着目する必要があるだろう。語り手は聞き手が若い女子学生（2名1組）であり、自分がかつて教師であったことから、語りによる効果を意識しながら出来事を提供していると理解することができる。また聞き手側は、話の出来事性に興味を示し、その語りから得られる情報を可能なかぎり再現するために「再構成」に工夫をほどこし、その整合性にも注意を払っている点のはっきりと分かる。この分析から読み取れるものは何か。

第1に視点の問題がある。短くはあったが、Bさんの記述は統括的視点が支配するテキスト（最後に書き手から聞き手の視点に変わった）であったのに対して、Cさんの場合、随所に「直接話法」に当たる記述が見られた。対話の臨場性や語り手の声が想像できる。また、聞き手の様子も目に浮かぶようにイメージしやすい。第2に人称だが、Cさんという主体がはっきりとテキストに現れており、ミメシス性が高いと言える。要約は主として「語ること」に重心があるが、この場合、「示すこと」の度合いが強いと考えられる。記述から、聞き手を含めた演劇的場面を彷彿とさせ、場の臨場性が強く伝わってきた。Bさんの事例とは違って、聞き手＝書き手の「介入」や「論評」は見られない。「コーダ」はどうだろうか。2回目の「終わり」には、戦後の生活に向けた伏線が張られている。物語がこのあと続くという予感を残しながらテキストはいったん閉じる。

3.4.3 Summaryの「パラテキスト」

Cさんのテキストに付随する「パラテキスト」として、2回分の観察記録を比べてみる。

◇（観察記録1）：発語は明快で話にまとまりがある。話し方の印象（「窓の方をみて考えてたけど、話す時はこちらを見てくれる」）、顔の表情（にこやか）、ゼスチャー（かなり多め）という記述から、語りの豊かさが推測できる。

◇（観察記録2）：発語回数（多い）、発語（かなり明快）、話のまとまり（有）は1回目と変わらない。話し方の印象（机の方を見つつも、顔を見て話す）からは、視線の方向性が1回目と同じであり、そこから話す前後は「窓」（1回目）や「机」（2回目）を見ているが、話す時は聞き手の方を見るという同種の行為であったことが確認される。顔の表情（豊か）ゼスチャー（有）は1回目とほぼ同じだと思われるが、「その他：生徒の話をしたときに涙ぐんでいた」によって、1回目にはない状況説明が追加された。（下線は筆者）

記述が1回目よりも具体化するが、聞き手に対する好意や配慮は変わっていない。「生徒の話をしたときに涙ぐんでいた」という1回目にはない状況説明が加わっていることから、昔の「生徒」の状況を1回目よりも思い出したのか、情動的な変化（悲しさ）が感じられる。

次に、認知機能に関する数値は以下のとおり。

◇（数値）：男性、80歳前半、介護度3、認知機能（HDSR : 27、MMSE : 27）

認知度は高く正常範囲であることが分かる。録音をすることで語り手に侵襲性を与えることも考えられるため一概には言えないが、Summaryから推測するかぎり、インタビューの逐語記録による語り分析の対象として、パッセージの取りやすい事例と感じた。

3.4.4プロット化

Bさんの場合に比べて、出来事性の高いCさんのライフレビューには「間テキスト性」の余地がかなりある。作品への連想も可能と思われるが、「そろばん」「百人一首」「**和尚(人名)」「**公」などから、主として歴史や文化に関わるテキストへの連想が可能である。そこから語り手を具体的にイメージすることができる。「間主体性」という観点からも、戦時中や戦後について直接経験がなくとも、間接的な情報は多く、そこから「聞いたこと」「見たこと」に応じて、読み手の「個別性」に基づく連想の場を広げることが可能だと思われる。

Cさんの語りには、光っている部分が多くあり、Bさんとは反対に影の部分はないように見える。しかし、この2回のインタビューから、聞き手=書き手は、読み手(筆者)に次のことを推測できるように記述の条件を整えている点は注意を惹く。

1回目の語りは「学校の先生」をしていた時代から始まっていた。聞き手が学生であり、自分が教えていた生徒たちを思い出すところが「はじめ」である。焦点となる「石を割る」という行為が語りの導線を作り、生徒との関わり(中間部)を形成していくと考えることができる。Cさんの“a plot with a mystery”(E.M.Forster)におけるキーワードは、「生徒」「石が割れる」「教えなかった」「石を割ってみせた」である。そこに「S.20.8.6にふっとんだ」「修学旅行」「遠足」という連想が継起する。しかし、最も重要なキーは、2回目の観察記録に聞き手によって書かれた「生徒の話をしたときに涙ぐんでいた」という表現である。Cさんは、聞き手である学生に対して好意的で、いろいろ話すうちに、語りの関係性を原因として、昔の「生徒」のことを思い出すに至った。その結果、語るはずではなかった現実、直接的には忘れていたかもしれない光景、それらが一挙に内面に溢れたのだと考えられる。その生徒たちがその日どうなったのか、語りには現れない「事実」が「存在」として想定される。分析者ならば、それをはっきりと言葉にする必要があるだろう。しかし、記述の間隙を埋めるにはあまりにも重すぎる。「要約」は解釈を避け、推測の域を出ることを差し控えた。このSummaryをひとつのテキストとして読むならば、そこには紛れもなく“a plot with a mystery”があると考えられる。Cさんの語りの出来事性は確かに高い。そして、それらの出来事はひとつひとつが連想の糸によって紡ぎ出されている。話す前には、語り手自身もここまでの「フラッシュバック」が生じるとは予測していなかったかもしれない。「語り」は人の心に潜むものを語り手に思い出させる。そして、それを可能とするのは、語り手(書き手)と聞き手(読み手)の間に生み出されるある領域に他ならない。「語り」が本来的に持つ一種の「深淵」、「関係性」という帯、と言い換えることができるだろう。

4. おわりに

以上、非文学テキストを対象としてナラトロジーの視点から分析を試みた。前述したように、これまでにあまり行われていない分析であり、当然のことながらその恣意性・妥当性については異論もあると考えられる。課題としては、今後新たな分析に当たって、共同研究者から提供される事例の精査および説明概念の更なる検討・補正を繰り返し練り直すことによって、分析事例を重ねていきたい。

参考文献

- G rard Genette, *Fronti res du r cit*, in *Figures II*, Seuil, 1969(Points, 2015).
ジェラルール・ジュネット, 『フィギュールII』, 花輪光監訳, 水声社, 1989.
- G rard Genette, *Discours du r cit*, in *Figures III*, Seuil, 1972 .
ジェラルール・ジュネット, 『物語のディスクール』, 花輪光・和泉涼訳, 水声社, 1997.
- Rita Charon, *Narrative Medicine: Honoring the Stories of Illness*, p.50, Oxford University Press, 2006.
リタ・シャロン, 『ナラティブ・メディスン—物語能力が医療を変える』, 斎藤清二/岸本寛史/宮田靖志
/山本和利訳, 医学書院, 2011
- R. N. Butler, *The life review: An interpretation of reminiscence in the aged*, *Psychiatry*, vol.26, pp.65–76,
University of Chicago Press ,1963.
- William Labov, *le parler ordinaire*, Ed.de minuit,1993; W.Labov&J.Waletzky, *Proceeding1966*, Rolf Noyer,
University of Pennsylvania, <<http://www.ling.upenn.edu/~rnoyer/courses/103/narrative.pdf>> .
- E.M.Forster, *Aspects of the novel*, p.61, Edward Arnold& CO.,1927, reprinted 1953.
『小説の諸相』(E.M.フォースター著作集8), 中野康司訳, みすず書房, 1994.
- David Lodge, *The art of fiction*, Vintage Books, 1992, reprinted 2011.
デイヴィッド・ロッジ, 『小説の技巧』, 柴田元幸・斎藤兆史訳, 白水社, 2007.
- 前田彰一, 『物語のナラトロジー 言語と文体の分析』, 彩流社, 2004.
- Robert Scholes, *Semiotics and Interpretation*, Yale University Press, 1982, reprinted 2009.
ロバート・スコールズ, 『記号論のたのしみ』, 富山太佳夫訳, 岩波書店, 2000.
- Wayne C.Booth, *The Rhetoric of Fiction*, University of Chicago Press, 1961; Second Edition, 1983.
ウェイン・C・ブース, 『フィクションの修辞学』, 米本弘一・服部典之・渡辺克昭訳, 水声社, 1996.
- Peter Brooks, *Psychoanalysis and Storytelling*, Blackwell, 1994.
ピーター・ブルックス, 『精神分析と物語』, 小原文衛訳, 松柏社, 2008.
- Peter Brooks, *Reading for the plot*, Harvard University Press, 1984
『ユリイカ』12月号(バルザック特集), pp.198-215, 青土社, 1994.

¹ 平成 25-27 年度「医療・心理・教育におけるナラティブ・データの汎用性の検証と分析手法の確立」
〔学術研究助成基金助成金, 挑戦的萌芽研究〕課題番号 (25580082) ; 平成 28-30 年度「医療・心理・
教育におけるナラティブ・データの分析手法の確立と文学研究への応用」〔学術研究助成基金助成金,
基盤研究(C) (一般)〕課題番号 (16K02606) .

² 寺西雅之・内田勇人. (2017). 「ライフレビューに関する文体論的考察—介護老人保健施設入所者の
事例より—」. *JAILA JOURNAL*. 日本国際教養学会 (3), 15-26.

³ 「シンポジウム: 多様なナラティブ・データ分析手法の可能性を問う—質的心理学と文学・文体論
との邂逅—」, 日本質的心理学会第 14 回大会 (2017.9.9, 首都大学東京荒川キャンパス) .

⁴ 奥田恭士, 「ナラティブ研究の可能性—文学と医療をどう結ぶか—」, 『兵庫県立大学環境人間学部研
究報告』, 第 19 号, pp.153-167, 2017; 奥田恭士, 「なぜ今ナラティブか?—その現状・背景・問題につい
て—」, 『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』, 第 18 号, pp.67-76, 2016.

⁵ ラボフ(Labov)&ワレツキー(Waletzky)の *Proceeding1966* 以降, coda は chute とも表記され, その位置
づけは微妙である。ナラティブには coda が無いものもあり, その基本的要素からはずすことが多い。